

第4章 国際会議等の報告

本科研主催の国際シンポジウム以外に、研究分担者及び協力者が研究発表を行った国際会議・シンポジウムについて、以下の通り詳細を報告する。

(1) 第二十回国際粵方言研討会

(The 20th International Conference on Yue Dialects 第二十屆國際粵方言研討會)

■論文執筆・発表者

飯田真紀

■会議の説明 <http://www.cuhk.edu.hk/chi/yue20/>

本学会は、「粵方言／粵語」（標準広東語及びその他の広東語下位方言）について専門に討論する国際会議で、現在は、ほぼ毎年12月に、香港・マカオ・広東省近辺の3地点にて回り持ちで開催されている。2017年12月8日～9日には香港で22回目の国際粵方言研討会が開催される予定で、中国語方言の専門の国際学術会議の中では22回という開催数は群を抜いている。発表者・参加者は上記の粵語圏からが多数を占めるが、中国大陸各地や台湾、日本、あるいは東南アジア、北米といった非粵語圏の研究者も一定数を占める。

■第二十回国際粵方言研討会報告

2015年12月11～12日に香港中文大学で第二十回国際粵方言研討会が開催された。本大会の主要なテーマは「比較文法 (Comparative Grammar)」であり、特に形式主義的アプローチ、通時的文法、インターフェイス研究といった観点からの粵語研究であった。

報告者が参加した第20回目という節目の会議は、リラックスした雰囲気の中、標準広東語のほか広東語の下位方言について、様々なアプローチから様々なテーマについて活発な議論が行われた。テーマに関しては、文末助詞をめぐる発表が多く、専門の分科会もいくつかが設けられるほどで、このテーマの学界での注目度の度合いが伺われる。本報告者(飯田)もその分科会の1つで発表を行い、有益なコメントが得られた。報告の内容は後に論文にまとめて大会論文集に寄稿したが、その日本語版を本科研報告書に掲載した。

本学会の特徴は、特に多層言語社会である香港での開催時にそれが際立って見られるが、発表言語が多様なことである。発表言語は従来、広東語、英語、中国語(共通語)のいずれかを用いることが可能であるが、香港での開催時は英語や広東語による発表の割合が高い。ただし、会議の雰囲気とも相通じるが、使用言語の選択は非常に柔軟で臨機応変的なところがある。発表者の中には、資料は英語で準備しておきながら、当日になり聴衆の様子を見て発表は広東語に切り替えるといったようなケースも見られる。そのほかに、今回、非常に印象に残った場面があった。

ある会場で、広東語非母語話者の発表者が中国語で発表した後に、香港出身の広東語母語話者の質問者が質問した。最初は相手に合わせて中国語で質問していたが、あまり上手とは言えない自分の中国語に不便を感じたようで、途中から英語に切り替えて質問を続け

た。この質問者は、香港の中堅世代以上の高学歴エリートの言語習慣を体現しているように思われ、大変興味深く感じた。すなわち、母語の広東語と方言の関係にあり、本来は習得がそれほど難しくないと中国語を、学習・使用機会があまりなかったため上手に話せず、むしろ母語とは言語系統や類型の点でかけ離れた英語の方が、かえって流暢に話せるという点である。多層言語環境・香港の一側面を垣間見た瞬間であった。

■論文・発表スライド

論文は以下のサイトからダウンロードできる。

http://www.cuhk.edu.hk/ics/clrc/chinese/pub_crcl_catalogues_97_1.html

飯田真紀 (2018) 粵語句末助詞 gE2 的語義和語義變化, 中國語文通訊 (Current Research in Chinese Linguistics), 第 97 卷, 第 1 期, 19-31.

粵語句末助詞gE2的語義和語義變化

飯田真紀 (北海道大學)

第二十屆國際粵方言研討會
2015年12月11至12日 香港中文大學

本報告的討論對象

粵語句末助詞“嘅 (ge2)”：

按照音長與調型的不同一般分為以下兩種

- 短而急升的ge2
- 長而緩升的ge2 (以下記作“gE2”)

= 本報告的討論對象

gE2的語義/功能
以往研究的看法

[1] 表達某種語氣或功能

(一) 著重“不肯定”語氣的分析

· 不肯定(uncertainty)或保留(reservation)
(Kwok1984, Matthews and Yip1994)

(1) 你條搵應該得gE2, 不過唔好太心急嗚。
(Your idea should be okay, but don't be too hasty.) (Matthews and Yip1994:350)

· 表示語氣的轉折(梁仲森1992)

(二) 著重“(加強)肯定”語氣的分析(李新魁1995, 方小燕2003)

(2) 你唔啱gE2。(是你不對。)(方小燕2003:130)

[2] 具有兩種功能(Fung2000)

(一) 提出疑問(casting doubt) = (“不肯定”或“保留”)

(二) 提供解釋(offering explanation)

本報告的目的

- 到底有幾種語義/用法?
- 如有多種語義/用法, 彼此之間有什麼聯繫?
---- 以往研究的分析不甚清晰

<本報告的目的>

1. 澄清gE2的語義/用法
2. 討論gE2的語義變化現象

gE2的兩種用法 從“不過,但係”的分佈看

第一種用法

- P(命題)與其後面的語段構成轉折關係
 後面出現“不過,但係”等連詞——“P + gE2 (, but...)”
- (3) 佢呢,係就係聽聽我話gE2,但係一講到club,就話冇得傾,一定要同男人飲先至夠爽wo5。(梁仲森1992:82)
 (她呢,聽話是挺聽話的,可是一說到club,就說沒得說,一定要跟男人喝才夠爽。)
- 即使沒有下文,也會被理解成轉折關係
 (4) 你係得 gE2。 ‘You’re competent, (but.....)’ (Fung2000:168)
- = 以往研究所說的“保留,不肯定”用法

gE2的兩種用法 從“不過,但係”的分佈看

第二種用法

- 有時,P(命題)前面也能出現“不過,但係”等轉折連詞
 =>不與後面的語段構成轉折關係
- (5) A:對唔住呀~多咗篇~ (對不起,多了一篇。)
 B: 乜咁唔小心呀?不過唔緊要gE2~我del咗喇。
 (怎麼那麼不小心呀?不過不要緊。我刪除了。)
 (由(10)改變而成)
- (6) 李:溫咗書未呀?
 (你溫習了沒有?)
 占:未呀... 不過都算有少少溫咗gE2!
 (沒有...不過還算有溫了一點點。)
 李:你快啲吹家溫啦! (你快點現在溫吧。)(由(9)改變而成)
- => 不宜與第一種用法一概而論,應該分出另外一種用法

第一種用法 gE2[1]的核心語義

- P+gE2後出現或暗示轉折性命題 (P+gE2 (, but...))
 = P+gE2 的後續語境中存在與其發生衝突(或對立)的命題
- ↓
 第一種用法(=gE2[1])的核心語義:
gE2[1]標誌,說話者主張的命題P會帶上與其發生衝突的命題
- 實際後續語境中存在衝突命題
 (7) 明仔係幾聰明gE2,不過懶a1,踢都唔郁。(梁仲森1992:82)
 (明仔是挺聰明的,不過懶呢,踢也不動。)
 - 只暗示衝突命題的存在
 減低P的真實性或價值 → 對P產生“不肯定,保留”語氣
 (8) 阿煩: 你有冇拍拖呀家? (你有冇談戀愛呀現在?)
 陳占: 我?有... gE2... (我?有...吧...)
 阿煩: 我都有...上車喇我, Bye。
 (我也有...上車了我, Bye。)(《19歲》145)

第二種用法 gE2[2]的核心語義 建議和假設

- <建議>
 第二種用法(=不與後面的語段構成轉折關係)的核心語義
 是否也能用“衝突(或對立)命題的存在”解釋呢?
 → 有利於統一解釋兩種用法的共通點
- <假設>
 第二種用法(=gE2[2])的核心語義
gE2[2]標誌,
 與說話者主張的命題P發生衝突的命題存在於先行語境
 或正確來說
說話者主張的命題P會與先行語境中的命題發生衝突
- 以下將通過觀察實例和gE2[2]的語法表現進行驗證

gE2[2]標誌 命題P會與先行語境中的命題發生衝突

- (9) 李:溫咗書未呀?
 (你溫習了沒有?)
 占:未呀... 都算有少少溫咗gE2!
 (沒有...還算有溫了一點點。)
 李:你快啲吹家溫啦! (你快點現在溫吧。)(《好天氣》249-50)
- 說話者主張的命題P: 還算有一點點溫習了
- 先行語境中的命題:
 (=聽話者所設想的命題) 根本沒有溫習
 (說話者回答說“未呀”)
- 與命題P發生衝突的是從先行語境推測出來的聽話者所設想的命題

命題P會與先行語境中的命題發生衝突

- (10) A:對唔住呀~多咗篇~
 B:唔緊要嘅gE2~我del咗la. (網)
- 說話者主張的命題P: 不要緊
- 先行語境中的命題:
 (=聽話者所設想的命題) 會有麻煩
- 衝突

命題P會與先行語境中的命題發生衝突

- (11) 占:冇紙巾添。(糟糕!沒有面紙。)
 M:喂,你做咩呀?(喂,你幹嗎?)
 占:唔使驚,我就唔會核突到幫你吮血gE2。我用件衫幫你抹走啲血啦。
 (不用擔心,我就不會噁心得幫你吸血的。我用衣服幫你把手擦掉吧。)(《好天氣》142-143)
- 說話者主張的命題P: 我不會幫你吸血
- 先行語境中的命題:
 (=聽話者所設想的命題) 你會做出古怪的事情
- 衝突

gE2[2]標誌 命題P會與先行語境中的命題發生衝突

- 要注意:句末助詞的功能 → 標誌命題提出方式等說話者的對話策略
 (cf. ‘illocutionary modification’;
 Hengeveld 2004 (e.g.)普通話 SFP “啊”, Narrog 2012 (e.g.)日語 SFP, etc.)
 → 實際先行語境中並不需要存在與P發生衝突的命題
- gE2[2] (作為句末助詞) 標誌,
 說話者把P當作會與聽話者設想的命題發生衝突的命題來提出
 = 彼此之間(故意)製造觀點衝突
 → 有必要維護自己立場並申明自己觀點的正確性
 → “解釋”語氣
 cf. “用法同‘嘅’(ge3),多了幾分解釋或同意的色彩”
 (李新魁等1995:512)
 “offering explanation” (Fung2000)

命題P會與先行語境中的命題發生衝突

實際先行語境中沒有與P發生衝突的命題：
→ 解釋或申明的語氣得到突顯

(12) (走進經理辦公室，詢問自己可否提前解約)

薛志文：經理。(經理。)

經理：有咩事，快啲講。(有什麼事，快點說。)

薛志文：eh.. 噉gE2.. 即係，我呢度，呀..，簽咗成八年合約.. 噉而家過咗成幾年嘞..

(eh.. 是這樣的.. 就是，我這裡，呀..，簽了八年的合約.. 那現在過了快一年多了..)

(電影《賣身契》)

13

“咪 P gE2”構式中的gE2[2]

• gE2還會出現在“咪 P gE2”構式

(13) 我呀……尋晚咪留嚟度gE2，你知道我見到邊個呀？

(我呀……昨天晚上不是留在這兒嗎，你知道我見到誰了嗎?)

(《19歲》73)

(14) 噉，嗰度寧寧舍舍咪有四疊gE2？見嗎？最高嗰疊隔離咪有一座gE2？噉，頂樓冇開燈嘅。

(瞧，那兒(格外突出的)不是有四座嗎？看見了嗎？最高那座隔壁不是有一座嗎？瞧，頂樓沒有開燈的。)

(《一籠風月》58)

14

“咪 P gE2”構式中的gE2[2]

(15) 導演：你嚟做咩呀？

(你來幹嗎?)

天仇：噉gE2，上次你咪叫我返屋企諗吓點樣死gE2？我都諗過，又俾我領悟到一啲新嘅啟發啦。……

(是這樣的。上次你不是叫我回家想想怎麼死嗎？我也想過，又讓我領悟到一些新的啟發。……)

(電影《喜劇之王》)

15

“咪 P gE2”構式中的gE2[2]

命題P會與先行語境中的命題發生衝突

“咪 P gE2”=固定的句式：

(16) 我呀……尋晚(咪/唔)留嚟度gE2，… (同(13))

• 構式意義 —— 向聽話者提醒本來應該共有而在聽話者的心裡尚未得到激活的命題

• gE2[2]的作用

• 說話者把P當作會與聽話者設想的命題發生衝突的命題來提出

→ 說話者當作[命題P在聽話者的心裡並不成立]

(例) “我昨晚留在此”不成立 ((13),(16))

要注意：“咪”本身不在命題P的轄域內

• 咪(唔係(不是))的作用

標誌說話者與聽話者之間的認識分歧

(cf. 曹泰和2000關於普通話“不是…(嗎)”的分析)

16

小結 兩種gE2

第二種用法的gE2[2]:

標誌命題P會與先行語境中的命題發生衝突
→ 本報告稱之為“提出異議”

第一種用法的gE2[1]:

標誌命題P會帶上與其發生衝突的命題
---無論實際後續語境中有否轉折性語段，
都會暗示衝突命題的存在，以減低P的價值
→ 本報告稱之為“提出保留”

17

gE2的兩種用法 共通點

• gE2的兩種用法

共通點=兩種用法的語義聯繫：

說話者提出的命題(P)會與語境中的某一個命題發生衝突

• 第一種用法 (“保留”用法)

說話者主張的命題(P)會與後續語境中的命題發生衝突

• 第二種用法 (“異議”用法)

說話者主張的命題(P)會與先行語境中的命題發生衝突

問題：哪個用法/語義先產生的？

18

gE2的語義變化和變化方向 本報告的看法

[異議] 針對聽話者設想的命題 --- 對話性

↓

[保留] 針對自己主張的命題 --- 篇章性

(對自己的觀點表示保留 → 轉折)

<理據>

句末助詞本身是具有對話性質的，而不是篇章性質的

→ 自然的演變方向：對話功能 > 篇章功能

19

類似的發展

◆ 句末助詞 對話功能 > 篇章功能

• ze1 :

P ze1 (低限(梁仲森1992:88)) > P ze1, Q (轉折)

(cf. Fung 2000:63, 飯田2006: 69)

(17) 你唔介意ze1, 我在乎alma3。

(你不介意而已，我在乎嘛。) (梁仲森1992:82)

• a4 :

P a4? (求證(梁仲森1992:94)) > P a4, … (引入話題)

(cf. Matthews & Yip 1994:341, 梁仲森1992:81,

飯田2006:86-87)

(18) 如果你唔肯a4, 噉我唔理ge3la3。

(如果你不肯呀，那我不管了。) (梁仲森1992:81)

20

跨語言的有關語義變化/語法化方向

- 聽話者指向的人際功能 > 篇章功能
(hearer-oriented interpersonal function) (textual function)
(例) 疑問句標記 > 條件句標記
(Heine et al. 1991: 191)
- 篇章/話語指向是後期(或甚至最後階段)的語義變化的特徵
(Narrog 2012:106)
(例) 日語: 祈使句 > 讓步條件句
(同181-183)

21

餘論 關於來源

gE2: 句末助詞“嘅(ge3)” + 語調“~”(升降調型: “強調” 梁仲森 1992:28)

cf. “咪 P + gE2” 構式的gE2不能換成“ge3”

→ gE2應該視為一個獨立的詞

語調“~”的作用: 目前不詳, 不過似乎與(觀點的)衝突或對立有密切關係

(19) 占: 冇紙巾添。

<有觀點衝突的情況>

M: 喂, 你做咩呀?

占: 咁使驚, 我就唔會衝突到幫你吮血gE2。

我用件衫幫你抹走啲血啦。

(同 (11))

(20) 佢雖然做咗好多壞事, 不過佢對啲仔女真係冇得頂。 <轉折句>

(21) 佢因為做咗好多壞事(*), ...

22

參考文獻

- 方小燕 2003 《廣州方言句末語氣助詞》, 暨南大學出版社。
- 李新魁 費家義 陳其士 袁和 陳定方 1995 《廣州方言研究》, 廣東人民出版社。
- 梁仲森 1992 《香港粵語語助詞的研究》, M.Phil.thesis, Hong Kong University of Polytechnic.
- Fung, Roxana Suk Yee. 2000. *Final particles in Standard Cantonese: Semantic extension and pragmatic inference*. Ph.D. Dissertation, Department of East Asian Languages and Literatures, The Ohio State University.
- Heine, Bernd, Ulrike Claudi, and Friederike Hünemeyer. 1991. *Grammaticalization: A conceptual framework*. Chicago: University of Chicago Press.
- Hengeveld, Kees. 2004. *Illocution, Mood and Modality*. In Booij, Geert and Lehmann, Christian and Mugdan, Joachim (eds.), *Morphology / Morphologie: Ein Internationales Handbuch Zur Flexion Und Wortbildung/An International Handbook on Inflection and Word-Formation, 1150-1201*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Kwok, Helen. 1984. *Sentence Particles in Cantonese*. Hong Kong: Centre of Asian Studies, University of Hong Kong.
- Matthews, Stephen and Virginia Yip. 1994. *Cantonese: A Comprehensive Grammar*. London: Routledge.
- Narrog, Heiko. 2012. *Modality, Subjectivity, and Semantic Change: A Cross-Linguistic Perspective*. Oxford: Oxford University Press.
- 飯田真紀 2005 「広東語の文末助詞」(2005年度東京大学大学院人文社会科学系研究科博士論文)
- 曹幸和 2000 「英語文の“不足”[吗]について—日本語と比較しながら—」《中國語學》247号: 311~327.

23

例句出處

(網): 在網絡上檢索到的例句作適當修改。

《一籠風月》: 杜國威 2000, 香港: 次文化堂。

《好天氣》: 少爺佔 2001, 香港: 商台製作有限公司。

《19歲》(《好天氣廣播劇小說續集—十九歲》): 少爺佔 2002, 香港: 商台製作有限公司。

24

(2) TCLT2016 (The 9th International Conference and Workshops on Technology and Chinese Language Teaching, 第九届国际汉语电脑教学研讨会)

■論文執筆・発表者

杉江聡子（北海道大学）、三ツ木真実（北海道文教大学）

■会議の説明 <http://www.tclt.us/tclt9/index.php>

TCLT は、21 世紀の技術と中国語教育に関する国際シンポジウム及びワークショップを開催する国際会議である。ICT 技術と教育の方法論及びカリキュラムのギャップを埋めると共に、ICT 活用の中国語教育の学術交流を強化することを目的として設立された。ICT を活用した中国語教育に関するパネルディスカッションと最新技術に関するワークショップの組み合わせを特徴としている。世界 17 の国・地域において、700 以上の論文を発表し、中国語教育における最新技術に関する 40 以上の実践的なワークショップを開催してきた。隔年で 5～6 月に次の国・地域で国際会議が開催されている。

TCLT1（ハミルトン・カレッジ、2000 年 8 月 10 日）

TCLT2（イェール大学、2002 年 6 月 7 日～9 日）

TCLT3（コロンビア大学、2004 年 5 月 28 日～30 日）

TCLT4（南カリフォルニア大学、2006 年 5 月 5～7 日）

TCLT5（マカオ大学、2008 年 6 月 6 日～8 日）

TCLT6（オハイオ州立大学、2010 年 6 月 12～14 日）

TCLT7（ハワイ大学マノア校、2012 年 5 月 25～27 日）

TCLT8（タフト大学、2014 年 6 月 6～8 日）

TCLT9（マカオ大学、2016 年 5 月 27～29 日）

■TCLT2016 報告

2016 年 5 月 27 日～29 日、中国のマカオで TCLT2016 が開催された。ICT 技術を活用した最新の教育・研究の展開や開発・実践・実験を中心とする発表が行われた。査読論文領域は下記の 14 領域であった。

1. CALL and its normalization
2. Mobile-assisted Chinese language teaching and learning
3. Cloud computing in Chinese language teaching
4. Intercultural exchange and web mediated communication
5. Virtual classrooms and eLearning
6. Blended instruction
7. Chinese MOOCs
8. Multimedia instruction and second language acquisition
9. Corpus study and database in Chinese language teaching

10. Emerging technologies and their applications in Chinese language teaching
11. Design, development, evaluation of digital instructional materials
12. Language testing and assessment with technology
13. Curriculum and program design with technology
14. Other related topics on technology-enhanced Chinese language learning and teaching

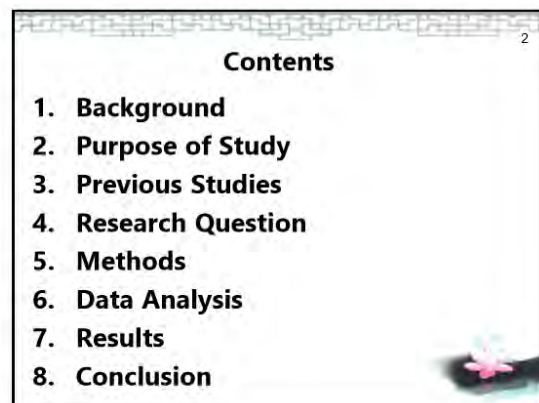
本研究は、「4.Intercultural exchange and web mediated communication」の領域で応募し、査読論文 Learning Experiences and their Values Created by Distance Learning –A Qualitative Analysis of Chinese Language Learning through Cross Cultural Exchange–（远程交流创造性的学习体验及其价值初探 –华语学习中跨文化体验的质性分析–）が大会発表論文として採択された。杉江・三ツ木が参加し、5月28日に発表を行った。環太平洋の国・地域から数多くの研究者が出席し、活発な質疑と情報交換が行われた。研究チームの組織形態や実践の環境設定に関する質問のほか、遠隔交流で扱ったテーマが日本の高校生活であったことから、日本の部活動に関する質問も飛び出した。中国語教員である杉江と英語教員である三ツ木が合同発表を行ったため、論文及び発表は両者が分担して英語で行い、質疑応答は杉江が中国語で行った。欧米からの中国語教育者も数多く参加しており、発表終了後の自由時間における意見交換において、英語、中国語及び日本語を用いたコミュニケーションが繰り返し広げられ、まさに多層言語環境における復言語的なコミュニケーションが実現していたといえる。

■論文・発表スライド

論文は北海道大学学術成果コレクションからダウンロードできる。

<http://hdl.handle.net/2115/62066>

Sugie, S. & Mitsugi, M. (2016). Learning experiences and their values created by distance learning— A qualitative analysis of Chinese language learning through cross cultural exchange, Proceedings of 9th International Conference and Workshops on Technology and Chinese Language Teaching, 265-270.



3

1. Background

- **Acquiring a new type of skills for the 21st century utilizing ICT**
(Japan Revitalization Strategy ~ JAPAN is BACK ~, 2013)
- **The promotion of new learning experiences with ICT**
(The Second Basic Plan for the Promotion of Education, 2013)

4

2. Purpose of Study

1. **Blended learning model (Japan – China)**
2. **Learning outcome qualitative data analysis explore learners' experiences**
3. **Learning achievement & values interpretation**


5

3. Previous Studies

- **Distance learning for Foreign language courses "Asia students' CCDL"**
(Sunaoka et al., 1999-2014)
- **Distance learning in high school, Okinawa, Osaka and Gaoxiong (Shiroma, 2013)**
- **Blended learning model with distance learning in high school, Japan and China, Mixed Methods (Sugie&Mitsugi, 2015)**

6

4. Research Question



Through the CCDL, what kind of learning experiences and values do the learners find from interaction in real communication with the Chinese native speakers?

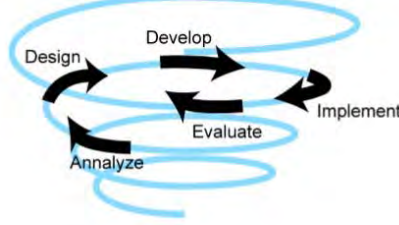
7

5. Methods : BL model with CCDL



8

5. Methods : Step-up & recycling learning process



9

5. Methods : Settings

- **Participants**
Japanese public high-school students (n=3)
Chinese university students (n=11)
- **Tools and Networks**
Tencent QQ
Japan : Windows PC, Wi-Fi connection
China : Windows PC, broadband network

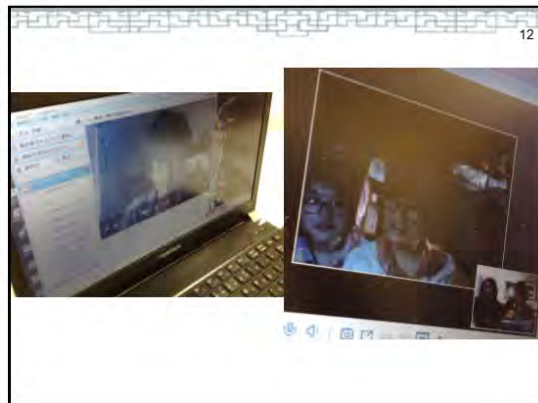
10



11

5. Methods : Topics in CCDL

1. Greetings and self-introductions
2. Memories from the Golden Week holiday
3. Topics of interest to ask Chinese students
4. The school festival



14

6. Data Analysis : QDA

- Grounded Theory (Glaser & Strauss, 1967)
- Constructing GT (Charmaz, 2006)
- M-GTA (Kinoshita, 2007)
- SCAT (Otani, 2008, 2011)
- Coding & Re-contextualization
- Multifaceted Analysis

15

6. Data Analysis: Questionnaire

Q1 Did the online exchange cause you to become more motivated to learn Chinese?

1. Not at all. 2. Very little. 3. I can't tell. 4. Somewhat. **5. Yes, very.**

Q2 How did you feel about the online exchange?

1. Benefits. 2. Drawbacks.

Q3 Things I learned through the exchange.

Q4 New things I learned to do.

16

6. Data Analysis: Coding

Q 1. Greetings and self-introductions 2. Memories from the GW holiday 3. Topics of interest to ask Chinese students 4. The school festival

新しい単語がたくさん知れたこと。日本語でも交流ができたこと！写真をいっぱい使ったり、お互いの国の映画をお勧めし合えたこと！

いつもよりスムーズに交流できたと思う。たくさん写真を見せてもらった。

1) benefits (student A) **increased vocabulary**

2) student B **improved listening skills**

3) student C **success in collaborative learning**

ろや違うところがわかってよかった。 たです！

17

7. Results: Benefits

- **Knowledge and skills**
 - vocabulary, listening
- **Emotion and attitudes**
 - friendly attitude toward communication shown by partners
- **Cross-cultural understanding**
 - Topic about movies helped mutual understanding

18

7. Results: Drawbacks

- **Settings and operation**
 - network connection trouble
- **Reflections and future challenges**
 - talking too much Japanese, repeating un-mastered words

19

7. Results: Learned through the exchange

- **Pleasure and satisfaction**
 - successful authentic communication
- **Reflections and future challenges**
 - failure of Chinese speaking
- **Different culture**
 - partners' great interest in Japan

20

7. Results: New achievements

- **Knowledge and skills**
 - use pre-learned expression with correct grammar
- **Emotion and attitudes**
 - active communication attitude, reaction speed

21

8. Conclusion

➤ **RQ. Through the CCDL, what kind of **learning experiences** and **values** do the learners find from interaction in real communication with the Chinese native speakers?**

22

8. Conclusion

- **The learning experiences**
- **Changes in knowledge, skills, learning attitudes**
- **Promotion of cross-cultural understanding**
- **Feeling of communication failure**

23

8. Conclusion

- **The values**
- **Pleasure, satisfaction, reflection, future challenges, understanding of different culture**
- **Improving knowledge, skills, emotion, attitudes**

24

Reference

SHIROMA Mariko. Fostering Students' Abilities and skills to Communicate and Collaborate – Chinese Language Education in Secondary Schools. Chinese Language Education. The Japan Association of Chinese Language Education. Vol. 11, pp. 33-45. (2013)

SUGIE Satoko, MITSUGI Makoto. The Practice of Blended Learning with Distance Learning for Chinese as a Foreign Language and the Evaluation with Mix Methods Data Analysis. Transactions of Japanese Society for Information and Systems in Education. JSISE. Vol. 32, No. 2, pp. 160-170. (2015)

SUNAOKA Kazuko, ZHENG WEI, UEYA Takashi, TANIGAWA Eiko. The relationship between acquiring linguistic knowledge and learners' interest of Internet chat topics. IEICE Technical Committee on Educational Technology (ET). ET 2010-79, Vol. 110, No. 405, pp. 13-16. (2011)

Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology. FY2014 White Paper on Education, Culture, Sports, Science and Technology Chapter 11. Promoting the Use of ICT. (2015)
http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpab201501/1361011.htm
 (accessed 01/13/2016)

**(3) 第三十四回中華民国英語文教学研究国際検討会
(The 34th International Conference of English Teaching and Learning
第三十四屆中華民國英語文教學研究國際研討會)**

■発表者

河合靖・小林由子（北海道大学）、佐野愛子・三ツ木真実（北海道文教大学）

■会議の説明 http://etra2017.nkfust.edu.tw/index.html#!/page_SPLASH

「The 34th International Conference of English Teaching and Learning（第34回英語教育・学習国際会議）」は、台湾の高雄にある国立高雄第一科技大学で2017年5月19日から20日に開催された国際会議である。会議の目的は、研究者、教員及び大学院生らが共に学び合いながら、英語学習や学習に関する研究を促進する機会を提供することである。

■第三十四回中華民国英語文教学研究国際検討会報告

大会テーマは「New Vision for ELT: Exploring the Needs of the Net Generation（英語教學新視野－探索網路世代的學習需求）」であり、論文・発表が募集されたサブテーマは下記の16領域であった。

1. Technology enhanced language learning and teaching
2. Flipped teaching and learning
3. Massive Open Online Courses (MOOCs) teaching
4. New approaches to English learning and acquisition
5. Language teaching methodology and communication strategies
6. Curriculum design and materials
7. The role of culture in English learning and teaching
8. English for specific/academic/occupational purposes (ESP/EAP/EOP)
9. Pragmatics and discourse analysis
10. Sociolinguistics
11. Psycholinguistics
12. Corpus linguistics
13. Language assessment and testing
14. Teaching literature
15. Translation and interpretation teaching
16. Any topics related to innovation in language use and learning

本研究は、招待発表として、Diverse Landscapes of Language Teaching in Asia: What Language Teachers Can Learn From Each Other という題目で口頭発表を行った。河合・小林・佐野・三ツ木が参加し、5月20日に発表を行った。カナダ、タイ、日本を含む

環太平洋の国・地域と台湾全土から数多くの研究者が出席し、活発な質疑と情報交換が行われた。英語教員である河合、佐野、三ツ木と日本語教員である小林が合同発表を行った。論文、発表及び質疑応答は全て英語で行われた。聴衆は非常に興味深く発表を聞いており、日本の教育政策についての質問が出たり、台湾の教育政策についての補足説明が提供されたりと、アジア地域の英語教育従事者としての連帯感が感じられた。他の研究発表については、台湾の研究者らの発表のレベルが高く、大学院生らの発表も興味深いものが多くあった。内容もさることながら、英語運用レベルが非常に高かったことが印象的であった。台湾の研究者の発表で、映画と多読のコンビネーションの講義に関する発表があり、河合、佐野、三ツ木は同じ英語教員の立場として、非常に刺激を受け、自らの講義に反映させるなど、本会議に参加して得られた成果を教育現場に直接応用する機会も得た。また、各自が所属する学会でライティングに関する研究を盛り上げる取り組みにもつなげた。このような盛り上がりを経験し、アジア全体として連携しながら、グローバル化時代の英語教育の発展を目指したいと感じられる会であった。

■発表スライド

Diverse Landscapes of Language Teaching in Asia
WHAT LANGUAGE TEACHERS CAN LEARN FROM EACH OTHER

Overview:
Diverse Landscapes of Language Teaching in Japan, HK, and Taiwan

Aiko Sano : Hokkaido Bunkyo University

How Successful Are We in Teaching English?

Japan: 41.4, 42.7, 42.5, 42.8, 43.0, 43.5

Taiwan: 41.1, 41.5, 42.0, 42.1, 42.2

Hong Kong: 41.1, 41.2, 41.3, 41.4, 41.5

<http://www.efjapan.co.jp/epi/>

Why Is Japan Such a Failure?

- Languages in Society**
 - Official Languages
 - Immigration Policy
 - Proportion of Monolinguals/Bi-multilinguals
 - Perceived Language Hierarchy
 - Socio-Political Situations
- Educational Schemes**
 - Governmental spending (J: 9.6%, H: 20.3%)
 - Language Education Policies
 - J: GS-"Foreign Language Activities"(2011)
 - H: G1-
 - T: G3- (2005)
- Social/Business Pressure for EE**
 - Varieties in educational opportunities
 - Frequency of exposure to English in workplaces
 - English use at Universities
- Teacher Qualification/Training**
 - Hiring of Native Speakers (JET, BA, Taiwan: BA+TESL/TEFL, Hong Kong: BA in English, Teaching certificate, TESL/TEFL)
 - English Proficiency Requirements

English Proficiency of the Teachers

Japan	Hong Kong	Taiwan
CEFR B2 level (32%)	Language Proficiency Requirement (for teachers of English and PTH) (Eq: TOEFL PBT 550, CBT 213, IBT79- CUHK)	General English Proficiency Test (Intermediate-High: CEFR B2)? Is this a requirement?

English Teaching in Japan

- 1960s English becomes *de facto* requirement
- 2002 Foreign Language becomes a requirement in junior high schools
- 2011 Foreign Language Activities in GS
- 2020 English will become a requirement in GS

The proportion of schools teaching English longer than required

De Facto English Requirements

- GS-G6: 35 hours / year
- Junior High School: 140 hours /year
- High School: 140~ hours/year

http://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/shidou_kihon/hon/hon_1_1.html

English Teaching in Japan

Limited opportunities for students to use English in classes

Little use of English by the instructors

http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsfiles/afiedfile/2016/04/05/1369254_3_1.pdf

Japanese Teaching in Japan

The # of students in need of JSL interventions

Increasing # of students in need of JSL interventions

http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/27/04/_icsfiles/afiedfile/2015/06/26/1357044_01_1.pdf

Japanese Teaching in Japan

The # of Japanese students in need of JSL interventions

Increasing # of Japanese students in need of JSL interventions

- 1.5 and 2 generations
- Returnees

Official JSL intervention scheme called for

http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/27/04/_icsfiles/afiedfile/2015/06/26/1357044_01_1.pdf

English Teaching in Japan

Diverse Student Profiles

- Foreign Students
- 1.5 and 2 generation
- Returnees

Predominantly in an EFL context, but rapidly becoming diverse

http://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kyokou/todofuken_jenshu/h28_hokoku/pdf/shisaku03.pdf

Languages in Hong Kong

OFFICIAL LANGUAGES	LANGUAGES IN EDUCATION
1842-1974 English	<ul style="list-style-type: none"> 7 out of 8 universities are EMI Secondary schools: EMI and CMI Public perceptions of schools: EMI > CMI (Shek, 2015) 1998: the MOI policy EMI available for only the top 40% of students: 114/514 schools = EMI Many international schools!
1974-1997 English and Chinese	
1997-Present Chinese and English	

http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/27/04/_icsfiles/afiedfile/2015/06/26/1357044_01_1.pdf

Language Education in HK

- Parents make choices regarding their children's MOI
- The # of outbound students continues to grow (5%+, 20% proceed to tertiary education)
- Highly mobile families due to globalization of business

G3 Girl (Born in HK)

Language used in Society: HK: English & Cantonese

Home Language: Japanese

School language: International Kindergarten (2-3), International Primary (4-11), Japanese school (6-8)

G6 Boy (Born in Japan)

Language used in Society: Japan, HK: E and C, USA, HK

Home language: Parents=J, Helper=E

School language: International Kindergarten (2-3), International reception (4-8), US local school (7-8), J school (8-9)

0-3 came to HK

Language Education in HK

Parents make choices regarding their children's MOI

- The # of outbound students continues to grow (5%+, 20% proceed to tertiary education)
- Highly mobile families due to globalization of business

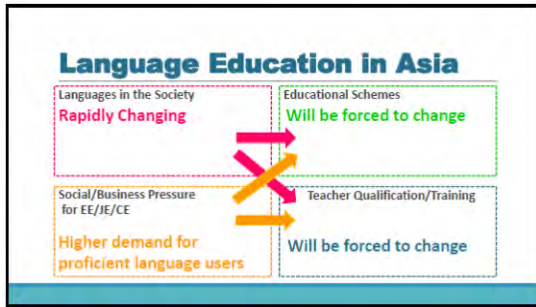
ESL/EFL distinctions becoming blurred

JFL/JHL distinctions becoming blurred

English Education in Taiwan

- 2001: G5-
- 2003: G3-
- 2002: G1- (台北市, 新竹市, 台中縣, 彰化縣, 南投縣, 台南縣, 連江縣)
- 2002: 國小低年級學習語言問題: Starts in G3 on a National Level
- 2003: 英語學習對國語學習影響之探討 Starting English teaching at an early stage does not hinder the acquisition of the national language
- By 2008: 50 % of University Graduates CEFR B1 (Has it been achieved?)

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingj/chukyo/chukyo3/015/siryu/05120501/008/004.htm



Teaching Speaking to English Learners in Japan

MAKOTO MITSUGI: HOKKAIDO BUNKYO UNIVERSITY
AIKO SANO : HOKKAIDO BUNKYO UNIVERSITY

The Present Situation of E-teaching at Japanese Universities

Predominantly EFL but more ESL-based compared to secondary education

- International students bringing in cultural/linguistic resources
- Students with experience studying abroad
- Higher ratio of native-speaker teachers

How can we go beyond the EFL context?

Nation's 4 Strands in Language Teaching

Meaning Focused Input
Meaning Focused Output
Language Focused Learning
Fluency Development
(Nation, 2007)

Nation's 4 strands in Language Teaching

Meaning Focused Input
Meaning Focused Output
Language Focused Learning
Fluency Development

Speaking, Academic Writing, Current affairs & Discussion, Debate

Speaking Classes at HBU

Phase 1: Topic Introduction (Expressions, Listening, Com. Strategies)
Phase 2: Skype Session (25 minutes x 2)
Phase 3: In-class discussion (Sharing what they learnt in their Skype sessions)
Phase 4: Written Assignment (Writing up what they learnt from the discussion)

Week	Topic	In-class activity	Assignments
1	Introduction	Introduction of the topic	Preparation for the quiz
2	Self-introductions	In-class discussion	Skype session
3	Self-introductions	In-class discussion	Written assignment
4	Self-introductions	In-class discussion	Written assignment
5	Food	Introduction of the topic	Preparation for the quiz
6	Food	In-class discussion	Skype session
7	Food	In-class discussion	Written assignment
8	Music	Introduction of the topic	Preparation for the quiz
9	Music	In-class discussion	Skype session
10	Music	In-class discussion	Written assignment
11	Free Time	Introduction of the topic	Preparation for the quiz
12	Free Time	In-class discussion	Skype session
13	Free Time	In-class discussion	Written assignment
14	Interview Test	Interview Test	Skype session
15	Written/ Listening Test	Written/ Listening Test	Preparation for the test

Free Time

There are a lot of ways to spend your free time. In each country, people have their own special ways of spending their free time, but they also have many things in common, too. The following will show some of the similarity and difference between Philippines, Japan and Vietnam.

As for similarities, they are common things such as listening to music, reading books, watching movies, TV's or dramas, and singing. People also enjoy going to karaoke in their free time. The small difference here is that Japanese usually going to karaoke shop, while Filipinos and Vietnamese usually buy a karaoke machine and enjoy karaoke at home.

One special way Filipinos spend their free time is drinking coconut wine with their friends. In Vietnam, instead of coconut wine, Vietnamese people go to the cafe to have coffee whenever we have free time, from very early at the morning until midnight. This is very common and obvious in the middle and southern area of Vietnam.

Another interesting thing is the cock fighting. Cock fighting can be seen in both Philippines and Vietnam. I do not know how often it is in Philippines, but in Vietnam, we usually have cock fighting every weekend. This is one of man favourite things to do in their free time. They race their own cocks, feed and take care of the cocks everyday. If the cock wins the match, the owner will receive medal and money as reward. People who only watch the match can also bet for the winner too. For me, this kind of cock fighting is quite cruel. Some cocks are badly injured after the match, and they may become the main dish on the owner's table that night.

Another funny way of spending free time that we heard from the Skype teachers is crab catching. Since he lives near the sea, he usually goes along side the beach and catches crabs. After that, he will have a crab BBQ on the beach. This is the funniest thing that I have ever heard of.

There are different ways of spending free time all over the world. Every country has their own unique ways, but they also do have many things in common. I think that knowing such a thing is the most interesting part that I have learnt from each lesson.

On free time

I learned about what is Philippine people do on free time. There is the similar thing and different thing between Japan and Phillip. In the similar thing is both Japanese and Pilipino like stay home, for example, surfing the internet, watch drama and movie. Philippine people watches Japanese drama and Korean drama. Listen to the music and take a nap. They also like outside activity. For example play sport, shopping, climbing.

On the other hand, there is a different thing. In the Philippines, there are beautiful beaches. So some people like to go the sea, and they do crab fishing. Another thing is in Philipps, and they have the karaoke machine in their house. So I think people in Philippine like singing. Some people go to a park and drink alcohol. They drink coconut wine. Coconut is sound like the Pilipino thing.

Grading Scheme

Speaking Assignments : 2 x 10=20
Vocab Quiz 2 x 4=8
Listening Quiz 3 x 4=12
Participation in Discussions : 2 x 4=8
Written task: 3 x 4=12 (one point each for content, length, and accuracy)
Interview Test: 10
Final Exam: 30 (vocabulary quiz and listening quiz)

How Did the Students Reacted to the Class?

Did you find the course challenging?

Strongly Agree/ Agree

57%

- ◊ Listening comprehension challenging due to unfamiliar English variation
- ◊ Putting thoughts into words in L2 challenging (esp. lack of vocabulary/lack of fluency)
- ◊ Lack of confidence for authentic communication
- ◊ Challenges related to the lack of IT literacy
- ◊ Internet connection



Did you find the course challenging?

Partly Yes and Partly No

- ◊ Depends on the instructor (some made use of the chat function)
- ◊ Very challenging when stuck because cannot rely on Japanese
- ◊ Great when communication flows, very hard when stuck
- ◊ Unfamiliar variation of English

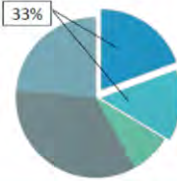


Did you find the course challenging?

Strongly Disagree/ Disagree

33%

- ◊ Free speaking is FUN! (teachers are friendly!)
- ◊ Can make use of non-verbal communication strategies
- ◊ Meaning can be negotiated in real communication
- ◊ Scaffolding on demand (word choice, speed)
- ◊ Gained sense of accomplishment → confidence
- ◊ Great opportunities to apply the skills learnt in class



Did the course provide unique learning experiences?

Strongly Disagree/ Disagree

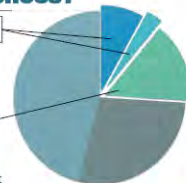
11%

- ◊ No communication means no learning
- ◊ Not much difference from normal classes
- ◊ Face-to-face communication is better
- ◊ Only learnt irrelevant things in English

Partly Yes and Partly No

15%

- ◊ Not much difference from the normal classes
- ◊ Too much pressure to speak English
- ◊ Can get similar experiences with the instructors at the university

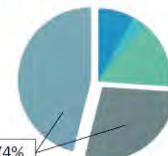


Did the course provide unique learning experiences?

Strongly agree/ Agree

74%

- Opportunities for scaffolding on demand
- Opportunities for authentic communication / Meaning focused output / Noticing the hole
- Communication strategies (gestures, facial expressions)
- Authentic linguistic input / English variations
- Learning L2 culture / wider perspectives (outside views)
- Motivation / Less anxiety



What the Skype Teachers Can Do but EFL Teachers Cannot

1. Provide authentic linguistic input
2. Expose students to a variation of English that students are not too familiar with
3. Provide students with opportunities to have meaning-focused input (information gap)
4. Provide students with opportunities for meaning-focused output (esp. one-on-one situation)
5. Lessen students anxieties about speaking English (yes, we are scary)

Motivational Theory as the Backbone of Language Learning in a Multilingual Environment

KOBAYASHI YOSHIKO HOKKAIDO UNIVERSITY

Contents

What is needed for language learning in a multilingual environment
 Summary of Sano and Mitsugi
 Aim of this presentation
 Motivation Theories around language learning
 Development of intrinsic motivation theory in educational psychology
 Implications - language learning design from the viewpoint of intrinsic motivation theory

What is needed for language learning in a multilingual environment

A tacit understanding about language learning in a monolingual environment
 • To become native speaker-like in the target language
 • Accuracy is the priority

But in multilingual environment ...
 • Not necessary to become native-speaker-like
 • Accuracy is not the priority
 • Use of the target language for communication autonomously is crucial

Summary of Sano and Mitsugi 1

Meaningful interaction:
 • provides opportunities
 • provides authentic linguistic input/scaffolding
 • generates "forced" output due to one-on-one situation
 • develops self-efficacy
 • by developing fluency
 • by motivating and building confidence through successful communication

Helpful interaction:
 • improves language skills
 • gives opportunities for self-reflection
 • facilitates meaning focused input and output builds motivation based on confidence

Summary of Sano and Mitsugi 2

Merits of the practice includes:
 • opportunities for authentic communication
 • opportunities for speaking with strangers
 • opportunities for prolonged speaking ("forced" output situation)
 • scaffolding (for L2 speakers)
 • opportunities for meaning focused output
 • understanding of an L2 culture
 • communication strategies (gesture, facial expressions...)
 • motivation

Aim of this presentation

to discuss language learning in a multilingual environment theoretically
 to show intrinsic motivation theory as the backbone of language learning in a multilingual environment
 to propose language learning activities designed from the viewpoint of the two dimensional intrinsic motivation model

Motivation theories

Motivation theories in SLA study and educational psychology are different

Motivational theories in SLA study
 • Integrative/instrumental motivation (Gardner & Lambert 1972)
 • Self Theory (Dörnyei & Ushioda 2009) among others.

Motivational theories in educational psychology
 • Intrinsic/Extrinsic motivation (Ryan & Deci 2000)
 • Causal attribution theory (Dweck 1975) among other theories.

Intrinsic/extrinsic motivation (Ryan & Deci 2000)

Intrinsic motivation
 • Doing an activity for enjoyment

Extrinsic motivation
 • Doing an activity as an instrument to get something else (ex. rewards)

Merits of intrinsic motivation vs. extrinsic motivation:
 • Intrinsic motivation enhances autonomy
 • Intrinsic motivation results in high-quality learning and creativity
 • Rewards or external control diminish intrinsic motivation and once the reward or control are given, intrinsic motivation disappears.
 • Intrinsic motivation is concerned with "deep learning strategy" such as meaningful learning, but extrinsic motivation is concerned with "shallow learning strategy" such as repetition (Horino & Ichikawa 1997).

Development of the motivation theory

Extrinsic motivation vs. intrinsic motivation (binary opposition)
 ↓
 Self-determination theory (Deci & Ryan, 2002)
 • Amotivation/extrinsic motivation changes into intrinsic motivation linearly
 ↓
 Two dimensional model: "Autonomy" and "Instrument / Purpose" (Hayami 1998, Ida 2015, among others)

Self-determination theory (Deci & Ryan 2002) 1

Motivation	Amotivation	Extrinsic Motivation				Intrinsic Motivation
		External	Introjected	Identified	Integrated	
Self Regulation	Non regulation					Intrinsic
Example	No intension	Be ordered for money	Feeling shame internal pressure	Important Necessary	Wanting to do it	Enjoyment
Autonomy	Low					High

Self-determination theory (Deci & Ryan 2002) 2

• Motivation is not a binary opposition but can change linearly
 • Amotivation → External → Introjected → Identified → Integrated → Intrinsic

Motivation is changed by three needs:
 • relatedness
 • competence
 • autonomy

Self-determination theory is applied to many second language learning studies

From Linear to Two Dimension Model

Self-determination theory is good, but ...

- is the motivation model is linear?
- is intrinsic motivation the best?
- is intrinsic motivation the goal?
- is instrumental motivation(ex. necessity) bad?

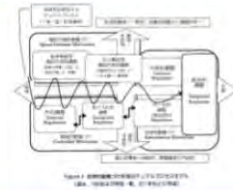


→ Two dimensional model

- Apart Autonomy from instrument/purpose

In the self-determination theory, purposely = autonomously and instrumental motivation is not autonomous

Two Dimensional Model : Dual Process Model to form Autonomous Motivation (Ida 2015)



Dual Process Model to form Autonomous Motivation (Ida 2015) 1

Apart Autonomy from instrument/purpose

The goal is not intrinsic but integrated motivation (in opposition to the self-determination theory)

The goal is "wanting to do it"

Instrumentality and purpose have the same value

The goal is to become autonomous

Traditional intrinsic motivation as a goal= autonomous motivation

Developing the process of motivation with purpose :

- Quasi-intrinsic Regulation by Others → Quasi-Intrinsic Regulation by Self
- Intrinsic Regulation → Integrated Regulation

Dual Process Model to form Autonomous Motivation (Ida 2015) 2

Process of Autonomization

- Quasi-Intrinsic Regulation by Others
- Joy provided by others, facial enjoyment...



- Quasi-intrinsic Regulation by Self
- Joy of self-efficacy, joy of using strategies...



- Intrinsic Regulation (enjoyment)



- Integrated Regulation (wanting to do it)

Implications from the Dual Process Model

The goal is to become autonomous

Means to facilitate learner autonomy:

- For low autonomous learners – support quasi-intrinsic regulation by Others
 - ex. by providing opportunities
- For middle level autonomous learners - supporting quasi-intrinsic regulation by Self
 - ex. self-efficacy, joy of using strategies

Summary of Sano and Mitsugi 1

Meaningful interaction:

- provides opportunities
- provides authentic linguistic input/scaffolding
- generates "forced" output due to one-on-one situation
- develops self-efficacy
- by developing fluency
- by motivating and building confidence through successful communication

Helpful interaction:

- improves language skills
- gives opportunities for self-reflection
- facilitates meaning focused input and output
- builds motivation based on confidence

Summary of Sano and Mitsugi 2

Merits of the practice includes:

- opportunities for authentic communication
- opportunities for speaking with strangers
- opportunities for prolonged speaking ("forced" output situation)
- scaffolding (for L2 speakers)
- opportunities for meaning focused output
- understanding of an L2 culture
- communication strategies (gesture, facial expressions...)
- motivation

Sano and Mitsugi's Practice

promotes quasi-intrinsic regulation by Others

promotes quasi-intrinsic regulation by Self

And focus on meaning shows how learners' attention moves from accuracy to content and language use in communication.

The practice can promote learner autonomy and language use in communication.

More "Quasi-Intrinsic Regulation" to provide scaffolding and to diminish anxiety (ex. shift away from accuracy, promote self-efficacy) may be needed for learners who evaluated low on this activity.

Summary

In a multilingual environment, it is important to use language for communication autonomously in a non-native way.

In the Dual Process Model of Motivation, the goal is to become autonomous.

To promote autonomy, quasi-intrinsic regulation by Self and Others contributes to the success of low-middle level autonomous learners.

The practice of Sano and Mitsugi can promote learners' autonomy.

In a multilingual environment, learning activities such as communication with strangers and meaning-focus with scaffolding are beneficial.

Tandem learning connecting learners of English in Japan and learners of Japanese in Hong Kong

KAWAI YASUSHI HOKKAIDO UNIVERSITY

Preview

Theoretical perspective presented in the previous presentations:

Meaning focused language learning in autonomous learning environment enhances language learning motivation.

⇒ Tandem learning as an example of autonomous meaning focused language learning

Organization of this presentation

Defining tandem learning
TOPLE program
Anxiety, flow, and attitude survey

Defining tandem learning: Online Language Exchange (Tele-tandem Learning)

"Learning in tandem can be defined as a form of open learning, whereby two people with different native languages work together in pairs in order

- to learn more about one another's **character and culture**,
- to help one another improve their **language skills**, and often also
- to exchange **additional knowledge** for example, about their professional life." (Brammerts & Little, 1996, p.13)



Three principles of tandem learning

Separation of languages: Divide one meeting session into two phases; use one language per phase.

Reciprocity: Both participants benefit by changing roles as learner and proficient other.

Autonomy: Learners themselves decide what and how to study.

(Vassallo & Telles, 2006)

Tandem learning and language exchange

Tandem learning: learning-oriented

Partners help each other to learn the partner's personality, culture and language via communication in the target language.

Language exchange: teaching-oriented

In turn, partners teach and learn each other's language. (Kobayashi, 2016)

Translanguaging Online Presentation and Language Exchange (TOPLE)

- Fall semester in 2015-2016: Hokkaido University, University of Hong Kong, University of Massachusetts, Amherst.
- Spring semester in 2016: Hokkaido University, University of Hong Kong, Chinese University of Hong Kong, University of Massachusetts, Amherst.
- Fall semester in 2016-2017: Hokkaido University, University of Hong Kong, Chinese University of Hong Kong, Hong Kong Polytechnic University, University of Massachusetts, Amherst, Helsinki University, University of Alabama.

TOPLE program

Meaning focused
Discovery of new knowledge
Seeking ownership of the language
as an L2 language user

TOPLE: means of communication

Email
Text chat
Online presentation

TOPLE activity: text chat

1. Partners exchanged emails to decide the text chat date.
2. They text chatted for an hour, 30 minutes in English, 30 minutes in Japanese. It was extended if both agreed.
3. They chose at least one topic each from a list for English and one for Japanese.

Example of topics: Subway systems; Boys, be ambitious; Minuteman; Octopus card; Soup curry; If you are the one; Hatsune Miku.



Anxiety, Flow, & Attitude Survey

- Scale for second language anxiety: FLCAS (Horwitz, E. K., Horwitz, M. B., & Cope, J., 1986; Yashima, T, et al., 2009). 33 items. Cronbach's $\alpha=.880$.
- Scale for flow (Czimmermann, E. & Piniel, K., 2016; Egbert, 2003). 27 items. Cronbach's $\alpha=.883$.
- An original attitude scale was created for tandem learning. 5 items. Cronbach's $\alpha=.822$.

Flow scale

Challenge-skill balance (5 items): This task was an exciting challenge for me, and I enjoyed that I could do what I had to do. ...

Attention (4 items): When doing this task, I was completely absorbed in what I was doing. ...

Interest (6 items): This task made me curious. ...

Control (4 items): During this task I could make my own decisions about how to proceed. ...

Boredom and apathy (8 items): I got bored during the task. ...

Spring semester in 2016

Second language anxiety (over 100 is considered being anxious)

32 out of 34 students replied.

Mean: 106.7 SD: 17.2 Max: 153 Min: 78

Flow experience (over 81 is considered having flow)

16 students that accomplished text chats

Mean: 92.8 SD: 8.8 Max: 108 Min: 78

Items for attitude survey towards tandem learning

1. Tandem learning activities were useful for improving my English proficiency. [Proficiency]
2. Tandem learning activities made me confident in speaking English. [Confidence]
3. Tandem learning activities were useful for reducing anxiety in speaking English. [Anxiety Reduction]
4. Tandem learning made me feel like studying English harder. [Motivation]
5. While doing tandem learning activities, I was absorbed in the task and forgot the passage of time. [Flow]

2016-2017 Fall semester: Results of attitude survey towards tandem learning

[Proficiency] Mean: 3.48 (/5; N=21)

[Confidence] Mean: 2.86 (/5; N=21)

[Anxiety reduction] Mean: 3.10 (/5; N=21)

[Motivation] Mean: 3.71 (/5; N=21)

[Flow] Mean: 2.45 (/5; N=20)

[Total] Mean: 15.48 (/25; N=20)

Mean per item: 3.11 (/5; N=20)

Conclusion

Meaning focused language learning among L2 users in an online context

L1 monolingual model to L2 bilingual model

Translanguaging in L2 communication

Meaning focused language learning among L2 users in online context

- Online speaking class connecting the Philippines and Japan
- Online tandem learning connecting Hong Kong and Japan
- Theoretical implications from motivation theories

L1 monolingual model to L2 bilingual model

Previous Model: **Monolingual Society Native Speaker Model**

Goal: To acquire native speakers' norm of language used in a monolingual society.

Achieve the target proficiency level first, then use the language with native monolingual speakers in the target language society.

Ideal L2-self (Dörnyei, 2009) ⇒ perfectionism; lack a sense of achievement (Lake, 2013)

Ought-to L2-self (ibid) ⇒ depression, anxiety, pessimism, psychological disorder (Lake, 2013)

L1 monolingual model to L2 bilingual model

A Proposed Model: **Multi-layered Language Society Bilingual Model**

Increase: Moving and immigrating across borders; L2-communication among non-native speakers

L2 speakers speak among native speakers ⇒ L2 speakers speak with other L2 speakers.

Language used in that communication is one language resource. (García & Li, 2014)

"... if ... ELL (English as International Language) belongs to its users, there is no reason why some speakers should provide standards for others." (McKay, 2002, p.126)

L2 speakers use the language while it is incomplete; L2 proficiency continues to develop while they use it.

Translanguaging in L2 communication

- "Languaging ... refers to the process of making meaning and shaping knowledge and experience through language." (Swain, 2006, p.98)
- Instead of producing and comprehending a message following an established language code, one will construct meaning together by using one's own language repertoire. (Swain, 2006)
- Attain the best communication by learning and adapting to each others' language behavior. (Garcia & Li, 2014)
- Learn while using a language.

Reciprocal co-learning among Asian language learners in multi-layered language environments

- ◆ Different backgrounds; one mind for communication
- ◆ Discovery of common features in varieties
- ◆ Unity in diversity
- ◆ Wise use of technological development: blending on- and off-line communications

Acknowledgement

This presentation is sponsored in part by Grants-in-aid for Scientific Research from the Japan Society for the Promotion of Science (JSPS), "Constructing Plurilingual Communities in East Asia: Implications from Hong Kong."

References

- Czimmermann, E. & Piniel, K. (2016). Advanced language learners' experiences of flow in the Hungarian EFL classroom. *Positive Psychology in SLA*, 193-214.
- Deci, E. R. & Ryan, R. M. (Eds.) (2002) *Handbook of self-determination research*. The University of Rochester Press.
- Dörnyei, Z. & Ushioda, E. (Eds.) (2009) *Motivation, language identity and the L2 self*. *Multilingual Matters*
- Dweck, C. S. (1975) The role of experience and attributions in the alleviation of learned helplessness. *Journal of Personality and Social Psychology*, 31, 674-685.
- Egbert, J. (2003) The study of flow theory in the foreign language classroom. *Modern Language Journal*, 87(4), 499-518.

References

- Garcia, O. & Li, W. (2014). *Translanguaging: Language, bilingualism and education*. London: Palgrave Macmillan.
- Gardner, R. C., & Lambert, W. E. (1972). *Attitude and motivational in second language learning*. Rowley, MA: Newbury House Publishers.
- Hayami, T. (1998). The psychology of self-construction: autonomous motivation [Jiko-keisei no dokizuke]. Kaneko Shobo.
- Horino, M., & Ichikawa, S. (1997). Motivation and learning strategies of high school students in English learning [Kokosei no eigogakushuu ni okeru gakushu doki to gakushu horiyaku], *The Japanese Journal of Educational Psychology* [Kyoiku Shinrigaku Kenkyu] 45, 140-147.
- Horwitz, E. K., Horwitz, M. B., & Cope, J. (1986). Foreign language classroom anxiety. *Modern Language Journal*, 70 (2), 125-132.

References

- Ida, K. (2015). An Attempt to Conceptualize "Quasi-Intrinsic Motivation" - Construction of the Dual Process Model for Autonomous Motivation [Giji-naihatsu dokizuke no gainenka kanosei wo saguru: Jiritsuteki dokizuke keisei no dual process model]. *Shizuoka Daigaku Kyoiku Gakubu Kenkyu Hokoku Jinbun Shakai Shizenkagaku Hen* 65, 139-150.
- Kobayashi, H. (2016). Significance and possibility of tandem learning [Tandem gakushu noigi to kanosei]. *Kitakyushu City University Kokusai-Ronshu* 14, 135-145.
- Lake, J. (2013). Positive L2 self: Linking positive psychology with L2 motivation. In M. Apple, D. Da Silva, & T. Felner (Eds.), *Language learning motivation in Japan* (pp 225-244). Bristol: Multilingual Matters.
- Little, D., & Brannmerts, H. (Ed.) (1996). *A guide to language learning in tandem via the Internet*. CLCS Occasional Paper No. 46, Trinity Coll., Dublin (Ireland). Centre for Language and Communication Studies. (ERIC Document Reproduction: ED 399 789)
- McKay, S. L. (2002). *Teaching English as an International Language*. Oxford University Press.

References

- Nation, I. S. P. (2007). The four strands. *Innovation in Language Learning and Teaching*, 1(1), 1-12.
- Ryan, R. M. & Deci, E. R. (2000) Intrinsic and extrinsic motivations: Classic definitions and new directions. *Contemporary Educational Psychology* 25, 54-67.
- Swain, M. (2006). Languaging, agency and collaboration in advanced second language proficiency in H. Symes (Ed.), *Advanced Language Learning: The contribution of Halliday and Vygotsky* (pp. 95-108). London: Continuum.
- Vasallo, M. L. & Telles, J. A. (2006). Foreign language learning in-tandem: Theoretical principles and research perspectives. *The ESPecialist*, 27 (1), 85-118.
- Yoshima, T., Noels, K., Shizuka, T., Takeuchi, O., Yamane, S., Yoshizawa, K. (2009). The interplay of classroom anxiety, intrinsic motivation, and gender in the Japanese EFL context. *Journal of Foreign Language Education and Research* 17, 41-64.

ykawai@imc.hokudai.ac.jp

あ と が き

本研究プロジェクトを進めてきた3年間に、世界的に大きな出来事が2つあった。1つは、イギリスの国民投票でEU離脱支持が残留支持を上回ったことである。もう1つは、アメリカの大統領選挙で移民の排除を掲げたドナルド・トランプが勝利したことである。どちらも、このプロジェクトの根底にある異なる言語・文化集団の共生の方向性とは逆向きの出来事である。

この変化を引き起こした主役は、教育的にも経済的にも劣位にある社会階層の人々である。彼らは、何らかの理由で自分たちが割を食っているという不満を抱えている。世の中には大きな家に住んで、いい車に乗って、うまいものを食っているやつらがいるのに、自分にはそれが与えられない。成功者たちは、それは本人たちの努力と能力が足りないからだと考える。しかし、不満を持つ側の人々には、そういう理由づけは意味を持たない。それでは解決不能だからだ。成功へ向かう社会的なシステムに乗っかるだけの財力も知力もないのは痛いほど知っている。

そこに、あなたたちがうまく行っていないのは、あの人たちのせいだと主張する人々が現れる。「あの人たち」とは、ナチスドイツのユダヤ人であったり、日本の在日朝鮮人であったり、アメリカのアフリカ系やヒスパニック系の人々であったり、イギリスの東欧からの移民であったりする。彼らのせいで盗みや殺人やレイプが増えて治安が悪化するのに、その人たちが自分たちの社会福祉や教育制度を「悪用」するのはまっぴらだというディスコースが、時代と場所を問わず繰り返し現れる。

このプロジェクトを始める際の隠れた動機の一つとして、実は、国際化や英語教育の低年齢化を手放しで礼賛する風潮に、多層言語環境はバラ色の世界というわけではないし、うまく考えてやっついていかないと様々な問題が起きるということを示す狙いもあった。しかし、現実の方が先にそれを証明してしまって、今度はそれに対する解決策を提示しなければ読み手が納得しない展開になってしまった。

言語を研究対象とする私たちは、異文化接触による摩擦にどうアプローチすればよいのだろうか。答えはまだない。だが、結局のところ、異なる社会グループの接触場面におけるコミュニケーションを、愚直に分析・考察することでしか、私たちが貢献する道はないように感じる。バラエティに富んだ母語と第二言語として話す言語の間のコミュニケーションをどう確保するか。第二言語ばかりではなくて、母語の階層間の変異や、その話者と他の言語グループとのコミュニケーションの研究が課題となりそうである。タイトルをつけるとすれば、「言語研究による平和学」とでもなるのだろうか。

平成30年3月
北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院 教授
河合 靖

業績一覧

*は本報告書の第2章に詳細を掲載している。

【著書】

山田智久 (2017) 『日本語教師のための TIPS77 第二巻 ICT の活用 第2版 (改訂版)』
くろしお出版 (全 302 頁)

山田智久 (2016) 「日本語教師を取り巻くテクノロジーの変遷」 吉岡英幸・本田弘之
(編) 『日本語教材研究の視点』 くろしお出版, 174-194.

【論文】

飯田真紀 (2015) . 粵語句末助詞“嘅 ge2”の两种功能和交互主观化现象, 《第十八届国际粤方言研讨会论文集》, 孙景涛・姚玉敏主编, 113-127. 广州: 暨南大学出版社.

飯田真紀 (2017) . 粵語句末助詞“嘅”的語義和語法化途徑, 《中國語文》4(總第 379 期), 421-437.

飯田真紀 (2018) . 粵語句末助詞 gE2 的語義和語義變化, 中國語文通訊 (Current Research in Chinese Linguistics) 97 (1) (第二十屆國際粵方言研討會特刊), 19-31.

小林由子 (2016) . 「日本語学習研究における内発的動機づけの再検討」『北海道大学国際教育研究センター紀要』 20, 81-92.

杉江聡子, 三ツ木真実 (2015) . 「遠隔交流を活用した中国語ブレンディッド・ラーニングの実践と混合研究法による評価」『教育システム情報学会学会誌』 32 (2) , 160-170.

杉江聡子, 三ツ木真実 (2015) . 「遠隔交流が創出する学びの経験とその価値—中国語学習における異文化体験の質的分析」『e-Learning 教育研究』 10, 1-13.

杉江聡子, 三木真实 (2015) . 「利用远程交流的混合式学习实践与其成果的质性分析—以日本高中中文课为例」『中文教学现代化学报』 8, 107-117. Available at <http://xuebao.eblcu.com/xuebao/essay/eightterm/11.pdf>

杉江聡子 (2016) . 「日本と中国の遠隔交流が創出する質的価値の探究」『中国語教育』 15, 105-123.

Sugie, S., & Mitsugi, M. (2016). Learning experiences and their values created by distance learning— A qualitative analysis of Chinese language learning through cross cultural exchange, *Proceedings of 9th International Conference and Workshops on Technology and Chinese Language Teaching*. 265-270.

【学会発表】

- 飯田真紀 (2015). 「広東語の文末助詞 “gE2” の意味変化」 日本中国語学会北海道支部例会. (2015年9月, 釧路公立大学)
- 飯田真紀 (2015). 「粵語句末助詞 gE2 的語義和語義變化」 第二十屆國際粵方言研討會. (2015年12月, 香港中文大學)
- * 飯田真紀 (2016). 「終助詞(文末助詞)の機能と特徴 ～ 広東語・北京語・日本語の場合～」 国際シンポジウム「東アジアの言語コミュニケーションを考える・多層言語社会香港からの示唆」. (2016年3月, 北海道大学)
- * 飯田真紀 (2016). 「広東語と日本語の終助詞について」 公開シンポジウム「日本人から見る多層言語社会香港」. (2016年6月, 香港大学)
- 飯田真紀 (2016). 「広東語の文末助詞 aa1maa3 の意味変化」 日本言語学会第153回大会. (2016年12月, 福岡大学)
- * 飯田真紀 (2017). 「跨語言視角下粵語句末助詞的定位問題～與日語句末助詞的比較～」 国際シンポジウム「多層言語環境時代の外国語教育」. (2017年3月, 北海道大学)
- Iida, M. (2017). A morphological analysis of the combinations of the sentence-final particles in contemporary Cantonese. The 22nd International Conference of Yue Dialects. (2017年12月, 香港教育大学).
- * 今泉智子 (2016). 「能力・可能性を表す表現の多義性について—日・中・英語の比較—」 国際シンポジウム「東アジアの言語コミュニケーションを考える—多層言語社会香港からの示唆」. (2016年3月, 北海道大学)
- Imazumi, S. (2016). Typological study on expressions of ability and possibility in English, Chinese and Japanese. The 8th Conference on Language, Discourse and Cognition. (2016年5月, 国立台湾大学)
- * 今泉智子 (2016). 「出来事を話す際に用いられる「のだ」について」 公開シンポジウム「日本人から見る多層言語社会香港」. (2016年6月, 香港大学)
- * 今泉智子 (2017). 「日本語・英語・中国語の可能表現—意味地図を用いた多義関係可視化の試み—」 国際シンポジウム「多層言語環境時代の外国語教育」. (2017年3月, 北海道大学)
- 今泉智子 (2017). 「可能表現にみるモダリティとヴォイスの相互関係—対訳データに基づく意味地図の可能性—」 日本認知言語学会第18回大会. (2017年9月, 大阪大学). 『JCLA Conference Handbook 2017』, 194-197.
- 河合靖 (2016). 「オンライン・タンデム・ラーニング：ボーダーレスな互惠・自律・協学」 2016年度 第2回 JACET 北海道支部研究会. (2016年11月, 北海道文教大学)
- * Kawai, Y. (2017). Combining Online Language Exchange with Public Speaking. 国際シンポジウム「多層言語環境時代の外国語教育」. (2017年3月, 北海道大学)

- * Kawai, Y., & Mitsugi, M. (2016). Hong Kong and Hokkaido online language exchange program. 国際シンポジウム「アジアの言語コミュニケーションを考える—多層言語社会香港からの示唆」. (2016年3月8日, 北海道大学)
- * 河合靖, 河合剛, 山田智久, 三ツ木真実 (2016). 「香港と日本の大学生によるオンライン言語交換学習」公開シンポジウム「日本人から見る多層言語社会香港」. (2016年6月, 香港大学)
- Kawai, Y., Kobayashi, Y., Sano, A., & Mitsugi, M. (2017). Diverse landscapes of language teaching in Asia: What language teachers can learn from each other, The 34th International Conference on English Teaching and Learning. (2017年5月20日, 国立高雄第一科技大学) (台湾, 高雄)
- * Sano, A. (2016). Literacy development of Japanese-English bilinguals growing up in multilingual Hong Kong. 国際シンポジウム「アジアの言語コミュニケーションを考える—多層言語社会香港からの示唆」. (2016年3月, 北海道大学)
- * Sano, A. (2017). Educating Deaf students as bilinguals: The cases in Japan and Hong Kong. 国際シンポジウム「多層言語環境時代の外国語教育」. (2017年3月, 北海道大学)
- 佐野愛子 (2016). 「多言語社会香港に育つ日英バイリンガルの作文力」HELES・JCA 北海道支部・JACET 北海道支部三学会会合同研究会シンポジウム「アジアの英語教育」. (2016年3月, 札幌市立大学)
- * 佐野愛子 (2016). 「香港在住の日英バイリンガル児童の作文力の発達に関する考察」公開シンポジウム「日本人から見る多層言語社会香港」. (2016年6月, 香港大学)
- 佐野愛子 (2017). 「複言語社会香港での子育てにおける親たちの選択」研究報告会「言語系 春のコロキアム 2017」. (2017年3月, 北海道大学)
- * 杉江聡子 (2016). 「遠隔交流を活用したブレンド型学習のためのインストラクショナル・デザイン」, 国際シンポジウム「東アジアの言語コミュニケーションを考える—多層言語社会香港からの示唆」. (2016年3月, 北海道大学)
- 杉江聡子, 三ツ木真実 (2016). 「遠隔交流が創る異文化体験とその価値—質的分析によるアプローチ—」『第14回 e-Learning 教育学会大会』. (2016年3月, 金沢大学) Available at <http://www.mle.cmc.osaka-u.ac.jp/WELL/conference/program2016.html>
- Sugie, S., & Mitsugi, M. (2017). Learning Experiences and their Values Created by Distance Learning—A Qualitative Analysis of Chinese Language Learning through Cross Cultural Exchange—, The 9th International Conference and Workshops on Technology and Chinese Language Teaching. (2016年5月, マカオ大学) (中国, マカオ)
- * 杉江聡子 (2016). 「遠隔交流を活用した中国語ブレンド型学習の経験が創出する価値」公開シンポジウム「日本人から見る多層言語社会香港」. (2016年6月, 香港大学)

- * 杉江聡子 (2017) . 「通過遠程交流創造出來的質性價值—中國學生的觀點分析」 国際シンポジウム「多層言語環境時代の外国語教育」. (2017年3月, 北海道大学)
- * 山田智久 (2017) . 「多言語社会における日本人学生の「グローバル」の捉え方に関する調査」 国際シンポジウム「多層言語環境時代の外国語教育」. (2017年3月, 北海道大学)
- 横山吉樹 (2015) . 「香港のイマージョン教育について」 2015年度大学英語教育学会北海道支部第3回研究会. (2016年3月6日, 札幌市立大学サテライトキャンパス)
- * Yokoyama, Y. (2016). Late immersion and band system in Hong Kong. 国際シンポジウム「アジアの言語コミュニケーションを考える—多層言語社会香港からの示唆」. (2016年3月, 北海道大学)
- * 横山吉樹 (2016) . 「香港の中等教育における EMI について:COLT 観察法を用いた分析」 公開シンポジウム「日本人から見る多層言語社会香港」. (2016年6月, 香港大学)
- * 横山吉樹 (2017) . 「香港のバンドシステムにおける EMI の評価と今後の可能性」 国際シンポジウム「多層言語環境時代の外国語教育」. (2017年3月, 北海道大学)
- 横山吉樹 (2017) . 「イマージョン教育再考—香港後期イマージョン教育の現実と問題点」 『全国英語教育学会島根研究大会発表予稿集』 440-441. (2017年8月, 島根大学)
- 萬美保 (2017) . 「『JLPTUFS アカデミック日本語 Can-do リスト』への期待」 国際シンポジウム「『JLPTUFS アカデミック日本語 Can-do リスト』の活用に向けて」. (2017年1月, 東京外国語大学)
- 萬美保 (2017) . 「外部指標としての Can-do リストと単位互換のプロセスについて」 (パネル発表) 国際シンポジウム「日本語教育実践の過程と成果の可視化に向けた記述枠組み」. (2017年3月, 名古屋大学)
- * 萬美保 (2017) . 「教師または大学主導による学生のための国際体験」 国際シンポジウム「多層言語環境時代の外国語教育」. (2017年3月, 北海道大学)
- * 萬美保 (2017) . 「学習活動としてのディベート: SOLO 分類による行動観察」 国際シンポジウム「今、そこにある多層言語環境」. (2017年6月, 北海道大学)

【招待講演, ワークショップ, その他】

- 飯田真紀 (2015) . 「粵語裏「V 到 NP」的構式意義以及「到」字的功能擴張特徵」 香港科技大学人文学部 Seminar (2015年9月21日) (招待講演)
- 飯田真紀 (2015) . 「粵語裏“V 到 NP”的構式意義以及“到”字的功能擴張特徵」 香港中文大學 中國文化研究所 吳多泰中國語文研究中心語言學講座 (2015年9月22日) (招待講演)
- 飯田真紀 (2017) . 「粵語句末助詞“ge2”的兩種用法和交互主觀化現象」 第17期中山大学語言学沙龍 中国・中山大学中国語言文学系 (2017年3月27日) (招待講演)

- 飯田真紀 (2017) . 「跨語言視角下粵語句末助詞的定位問題～與日語句末助詞的比較」
第 18 期 中山大學語言學沙龍 中國・中山大學中國語言文學系 (2017 年 3 月 28
日) (招待講演)
- 山田智久 (2017) . 「基調講演：日本語教育における ICT 活用～過去・現在・未来～」
インドネシア日本語教育学会・国際交流基金共催 ICT-Based Japanese
Language Learning, International Conference on Japanese Studies 2017.
(2017 年 8 月 25 日, インドネシア)
- * 萬美保 (2016) . 「香港大学日本研究学科における日本語 Can-do-statements の開
発と実施」国際シンポジウム「アジアの言語コミュニケーションを考える—多層
言語社会香港からの示唆」. (2016 年 3 月, 北海道大学) (招待講演)
- 萬美保 (2017) . 「日本語カリキュラム改訂の背景と手順 Can-do リストの役割につ
いて—『香港大学日本語スタンダード』の例」, 国際シンポジウム「日本語教育
実践の過程と成果の可視化に向けた記述枠組み」. (2017 年 3 月, 名古屋大学) (招
待講演)

平成27年～平成29年度 科学研究費補助金
基盤研究(B)(一般) (課題番号:15H03221)
研究成果報告書
東アジア圏の複言語主義共同体の構築
—多言語社会香港からの示唆—

発行 北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院
〒060-0817 札幌市北区北17条西8丁目

平成30年3月 発行
印刷 北海道大学生協同組合 印刷・情報サービス部
電話/FAX : 011-747-8886
